

西村 賢太著

### 芝公園六角堂跡

西村賢太の小説には、主人公がしばしば「根が××にできる貴多は…」と、自分を評したり決めつけたりしながら話が進む際、立った特色がある。たとえ

「根がどこまでも土方スタイルにできてる貴多とは、おおよそ無縁の雰囲気を持つ店内にあるものらしく、た」本書冒頭に収められている表題作での、貴多が高級ホテルのレストランで開かれる音楽会に出かけてのひとくたである。会場の、今ふうには言えはセレブな雰囲気に対しての違和感を言っているわけだ。貴多からすると、会場へ案内するボーイにまで値踏みされる

後悔体質」、「根が血の巡りの滞滞体質にできてる彼」、「根が可憐にでき過ぎている貴多」、「根が極めてお調子者にできてる貴多」等々といった具合である。これを要するに、「根」は彼の意識であり目であり、時にはこの世と相渉るための武器でもあるのだ。これらはみな表題作「芝公園六角堂跡」に見える例だ。スペースが許せば全部

「根がどこまでも土方スタイルにできてる貴多とは、おおよそ無縁の雰囲気を持つ店内にあるものらしく、た」

本書冒頭に収められている表題作での、貴多が高級ホテルのレストランで開かれる音楽会に出かけてのひとくたである。会場

の、今ふうには言えはセレブな雰囲気に対しての違和感を言っているわけだ。貴多からすると、会場へ案内するボーイにまで値踏みされる

後悔体質」、「根が血の巡りの滞滞体質にできてる彼」、「根が可憐にでき過ぎている貴多」、「根が極めてお調子者にできてる貴多」等々とい

「根がどこまでも土方スタイルにできてる貴多とは、おおよそ無縁の雰囲気を持つ店内にあるものらしく、た」

本書冒頭に収められている表題作での、貴多が高級ホテルのレストランで開かれる音楽会に出かけてのひとくたである。会場

の、今ふうには言えはセレブな雰囲気に対しての違和感を言っているわけだ。貴多からすると、会場へ案内するボーイにまで値踏みされる

後悔体質」、「根が血の巡りの滞滞体質にできてる彼」、「根が可憐にでき過ぎている貴多」、「根が極めてお調子者にできてる貴多」等々とい

「根がどこまでも土方スタイルにできてる貴多とは、おおよそ無縁の雰囲気を持つ店内にあるものらしく、た」

本書冒頭に収められている表題作での、貴多が高級ホテルのレストランで開かれる音楽会に出かけてのひとくたである。会場

の、今ふうには言えはセレブな雰囲気に対しての違和感を言っているわけだ。貴多からすると、会場へ案内するボーイにまで値踏みされる

後悔体質」、「根が血の巡りの滞滞体質にできてる彼」、「根が可憐にでき過ぎている貴多」、「根が極めてお調子者にできてる貴多」等々とい

「根がどこまでも土方スタイルにできてる貴多とは、おおよそ無縁の雰囲気を持つ店内にあるものらしく、た」

本書冒頭に収められている表題作での、貴多が高級ホテルのレストランで開かれる音楽会に出かけてのひとくたである。会場

の、今ふうには言えはセレブな雰囲気に対しての違和感を言っているわけだ。貴多からすると、会場へ案内するボーイにまで値踏みされる

後悔体質」、「根が血の巡りの滞滞体質にできてる彼」、「根が可憐にでき過ぎている貴多」、「根が極めてお調子者にできてる貴多」等々とい

「根がどこまでも土方スタイルにできてる貴多とは、おおよそ無縁の雰囲気を持つ店内にあるものらしく、た」

本書冒頭に収められている表題作での、貴多が高級ホテルのレストランで開かれる音楽会に出かけてのひとくたである。会場

西村賢太



四六判・192頁・1500円  
文藝春秋  
978-4-16-390525-9  
TEL. 03-3265-1211

## 北町貫太の「根」語り

本来の自分を取り戻そうとするとときに激しく

勝 又 浩

知るほどの人はみな知っているに違いない藤澤清造、彼が貧窮のなかで凍死した、あの場所には他ならないからだ。そういう場所の近くに行くと、しかも身にそぐわぬ華やかな世界に泥んでいる、そういう自分の今を、彼は「慥」く思う。自分は墮落しているのではないか。そうして帰途、彼は改めて「師」の終焉の地に回り、そこに佇んでみて、自身の志の出発点を確認し、また湧き上がる情念を確認するという一編だ。

本書の表題作は、それをごく簡単に要約してしまえば、主人公の、最近のテレビ番組の大きい自身の言動のなかから、何とか本来本当の自分を取り戻そう、掴みなおそうとする、そういうところ、貴多の「根」語りはいっそう強く激しくなるのか。かつまり、ひろし氏「文芸評論家」



文学

芸術

を二覧表にしてみた。多くの「根」が言われている面白さだが、いま試みに数えてみれば一六種類あった。ついでだから連作でもある。三編も数えてみる。二作めの「終われなかつた夜の彼方」には一〇例、三作めの「深更の巡礼」では少し減って四例、最後の「十二月に泣く」が六例となっている。これらのなかには「お調子者」と「調子き」、「ひとくたスタイル」と「ひとくたスタイル」